

「すべてのものをキリストのうちに新しく見る」

# 聖イグナチオの生涯と靈性

～聖イグナチオの回心とともに～



# はじめに



イエズス会は2021年5月20日から2022年7月31日までを「聖イグナチオ年」と定めました。パンプローナの戦いで負傷し、それがきっかけとなって、回心の道を歩みはじめ、イエズス会創立にいたったことを記念するためです。アルトゥーロ・ソーサ総長は、2019年にイエズス会のミッションを方向づける指針を発表しました。世界中のイエズス会がこの指針に従って、そのすべての働きを今日の時代にふさわしく刷新することを求めています。この記念の年を定めたのは、イエズス会のミッションを刷新していく原動力を強めるためです。聖イグナチオの回心体験を今一度振り返り、味わい、イエズス会員自身が回心の道を歩むことが大切だからです。

このため、世界各地でさまざまな行事が行われています。上智学院カトリック・イエズス会センターも、世界中のイエズス会と心を合わせて、できるだけのことをしてみようと計画しています。この小冊子もそのひとつで、何よりも、聖イグナチオについて知つてもらいたいという思いが込められています。

日本においては、聖フランシスコ・ザビエルは誰でも知っていますが、聖イグナチオはそうでもありません。上智大学においては、「LOYOLA」という教学支援システムとしての名前は知っていても、「ロヨラ」の由来については何も知らないだううと思います。この機会にぜひ、「ロヨラの聖イグナチオ」という名前を知つもらいたいと願っています。

そして、「すべてのものをキリストのうちに新しく見る」体験をすれば、なお望ましいことです。聖イグナチオは、回心の道を歩み続けるなかで、「この新しい生き方は何だろうか」と問い、「理性が開けて、すべてのものが新しく見える」体験をしました。私たちも、日々の生活のなかで、何かを知ることによって、新しく見えることを体験することができます。毎日の学びのうちに、新たな出会いを通して、「新しく見える」体験をします。それが聖イグナチオの「靈性」に触れることになるのだと思います。そのための企画をいろいろと考え、実行していきたいと思っています。

カトリック・イエズス会センター長  
李 聖一



ロヨラ城跡に建つ聖イグナチオのバシリカ  
The Jesuit Curia in Rome

イエズス会の創立者聖イグナチオ・デ・ロヨラは、1491年、北スペイン・バスク地方のロヨラ城で生まれた。ロヨラ家は貴族で、代々スペインの国王に忠誠を誓う家柄だった。そのためイグナチオは年少の頃から騎士道教育を受け、いつも騎士として主君に仕えることを夢見ていた。15歳になった時、父の友人を通して、彼はスペイン王家の重臣に預けられ、騎士としての教育を受けるとともに、礼儀作法や立ち居振る舞いの優雅さを身に付ける機会を得た。彼は希望に満ちた心でそれらを習得していった。王家の重臣のもとで彼は10年間、華やかな生活を送り、そして勇敢な騎士になっていった。

## ■ 恵みの負傷と病床



パンプローナの戦い(1521年5月20日)  
Albert Chevallier-Tayler 作 © 2011 Jesuit Institute

「彼は26歳の時まで  
世俗の虚栄におぼれていた。

特に、虚しい大きな  
名誉欲を抱き、武芸に  
喜びを見出していた。」

(『自叙伝』1)

イグナチオに自らの夢を実現するチャンスが訪れた。スペインとフランスの戦いの中、1521年5月20日に、フランス軍はパンプローナまで進撃してきた。彼は城塞守備に当たっていた。19日の晩に、多くの人々は防衛することは困難と感じ、場合によっては降伏もやむなしと思っていたが、彼はいろいろな理由を並べ立てて指揮官を説得し、防衛する覚悟を決めた。しかし、銃撃戦が長く続き、砲弾が彼の足にあたり、両足に重傷を負った。

彼が重傷を負って、まもなくフランス軍はパンプローナ城塞を占領したが、彼の勇敢さを称え、彼に丁寧な処置を施してからロヨラ城に送り返した。ロヨラで、イグナチオは2度手術を受け、長く病床につかなければならなかった。療養中、彼は大好きな騎士物語を読もうと思っていたが、そのような本がなく、よって『キリスト伝』と『聖人伝』を読むしかなかった。

しかし、それらの本を読みながら彼の心は徐々に変わっていた。聖人たちのように主キリストに仕え、キリストの福音のために自分をささげることを望むようになった。この望みと対立する世俗の思いに浸る時、彼はそれに喜びを感じたが、それに飽きたと、気が重くなり、「うら寂しい感じがして不満が襲ってきた」(『自叙伝』8)。聖人たちの生きた道を考えた時、慰めばかりか、喜びや満足さえ覚えた。また、それだけでなく、考えを止めた後までも満足感や

喜びが残った。彼は時とともにそのような自分の心の中の異なった動きを識別することを習得した。この心の識別に従って、彼は英断を持って新しい道を選んだ。それはエルサレムに巡礼し、生涯をキリストにささげるという決断であった。

「イグナチオは、キリストのうちに、  
すべてのものが新しく感じられた。」

(『自叙伝』31)

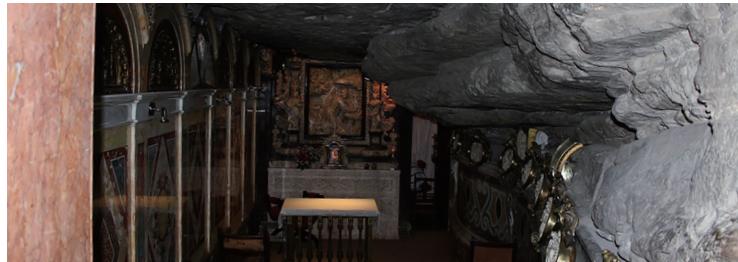


聖イグナチオの回心  
Lorenzo Coullaut Valera 作 © 2018 Jesuit Institute

## ■ 巡礼の道

傷がすっかり癒えた後、1522年2月末、彼はロヨラ城を出て、エルサレムへの巡礼に旅立った。自叙伝に書いてあるように、彼は自分自身を「巡礼者」と呼ぶようになった。まず、巡礼者イグナチオは心身を清めるために、モンセラート聖堂で司祭にこれまでの生涯の罪を告白した。彼は自分の服を貧しい人に与え、キリストのように貧しい衣服をまとった。3月24日にモンセラートの聖母像の前で、徹夜で祈り、新しい旅立ちの決意を聖母に誓った。そして、「キリストの騎士」になる決意のしとして、自分の武具も聖母にささげた。

さらに、巡礼を続けて、彼はマンレサで数日間滞在して、直近の靈的体験について記述するつもりだったが、思いがけなく約1年の滞在となった。マンレサで神は彼に特別な靈的恵みと使命を与えた。



マンレサの洞窟。ここで聖イグナチオは1年ほど滞在した。



マンレサの町を流れるカルドネル川。この少し上流において、聖イグナチオは神秘的な体験をした。

The Jesuit Curia in Rome

マンレサでの神秘体験(1522年3月-1523年3月)  
Lawrence 作(聖イグナチオ教会(ニューヨーク市)の窓から撮影した写真)

「この頃、神はちょうど小学校の先生が子供に教えるように  
彼を教え導かれた。彼がまだ無知無能であったためでもあろうし、

また、良き師を持たなかつたためでもあろう。

いずれにせよ、神がこのように取り扱われたことは確かであると、  
彼はその当時も今も信じている。」(『自叙伝』27)

この神の教育は、初めのうち非常に苦しいものであった。回心後の内的道のりについて、多くの疑問が起り、ひどく悩まされ、再三彼は絶望の淵に落ちた(『自叙伝』22)。しかし、絶えまい熱心な祈りによって、彼はこの心の暗夜を克服していく。彼は新たに心の平和と希望を得たのである。また神はますます豊かに彼の心を照らしていく。神とキリスト教の教義や、人々の信仰生活の手助けという使命などを彼に教えた。それによって、イグナチオは、神のために新しいイグナチオに変容したのである。この間、彼は靈的経験、内省、感情、心の違った動きを思いめぐらし、書きとめた。これが『靈操』の原案となり、1548年にラテン語で出版された。

1年ほどマンレサにとどまってから、巡礼者イグナチオはあこがれの聖地巡礼に出発した。エルサレムで彼はキリストの足跡を観想し、祈り、多くの慰めを感じた。彼はキリストへの愛に燃えて、イエスと共に、イエスと同じように歩むことを強く望んだ。聖地に永住して、人々の靈的な生活を手助けしようと思ったが、聖地を統括している修道院の院長に拒絶されて、実現できなかった。

エルサレムから帰って、巡礼者イグナチオは他の問題に直面した。マンレサで受けた使命に生きるために、計画を立てなければならなかった。次に何をするべきか、いつも彼は自問していた。既に彼は勉強する必要があることを強く感じていた。

「エルサレムにとどまることが神のみ旨でないと分かった後、今度は何をするべきかを絶えず考え続けた。  
やがて人々の靈魂を助けるには、しばらくの間  
勉強をしたら良いと思った。」(『自叙伝』50)



バルセローナでラテン語を学ぶ(1525年)。  
Albert Chevallier-Tayler 作 © 2011 Jesuit Institute



イグナチオはパリ大学でザビエルに出会った。  
Carlos Saenz de Tejada 作 © 2021 Jesuit Institute

勉強するために、彼はバルセローナに戻り、全力を尽くすことを決心した。33歳になったイグナチオは子供と一緒にラテン語を最初から勉強し始めた。こうして約2年後、彼はアルカラで哲学の勉強をすることにした。アルカラで哲学の勉強しながら、同時にキリスト教について人々に説明し、「靈操」を指導した。しかし、神学課程を修了していなかったため、彼はキリスト教について教えることができなかった。そこで彼はサラマンカに一時滞在し、パリに行って神学の勉強をすることに決めた。

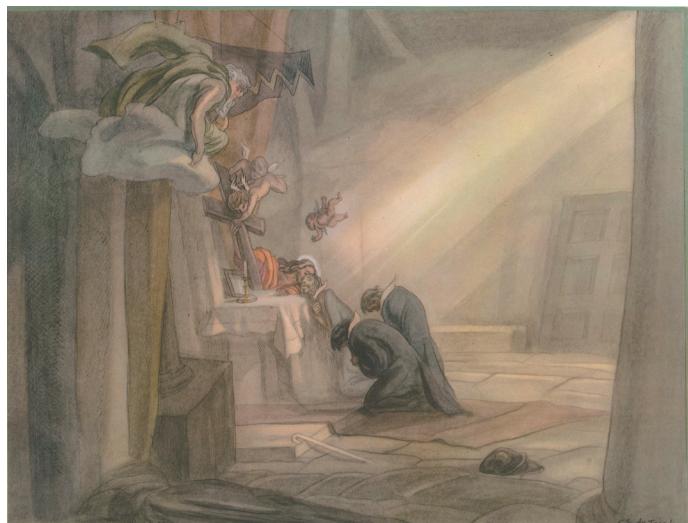
パリで一生懸命勉強を続ける間(1528-1534)、「靈操」によって、彼は最初の同志として、ペトロ・ファーブル、フランシスコ・ザビエル、ディエゴ・ライネス、アルフォンソ・サルメロン、ニコラス・ボバディリア、シモン・ロドリゲスの6人の同志たちを得た。彼らはイグナチオがマンレサで神から受けた教育と使命に密接に与り、この使命をイグナチオと共に実行する決心を固めた。

1534年8月15日、聖母の被昇天の祝日に、彼と6人の同志たちはパリのモンマルトルの丘にある聖堂に集まって、誓願を立てた。彼らの中で、唯一司祭に叙階されていたファーブルが司式するミサの中、聖体拝領前に一人ひとり、清貧・貞潔・エルサレム巡礼の三誓願を立てた。エルサレムに巡礼し、聖地に永住し、そこで人々のために働く。もしそれが不可能だったら、教皇の決定に自分たちの活動を委ねるとの誓願であった。



モンマルトルで同志たちと一緒に誓願を立てた(1534年8月15日)。  
Carlos Saenz de Tejada 作 © 2012 Jesuit Institute

しかし、長びく戦争でエルサレムへの巡礼は不可能となつた。そのため、1537年、彼らはグループを分けて、今後の指示を仰ぐためにローマにいる教皇に会いに行くことにした。巡礼者イグナチオはファーブルとライネスと一緒にローマに赴いた。11月中旬に、ローマから数キロ離れたラ・ストルタという小さな町にたどり着いた。その地の小聖堂で祈っていた時、イグナチオは神の偉大な恵みを受けた。彼は永遠の御父と十字架を担うキリストを見て、御父が自分を御子のそばに置かれたことを悟った。そして、彼は、「ローマであなたがたに恵みを与える」という御父の約束を聞いた。その神からの大きな照らしは、15年前にマンレサで受けた照らしを豊かにし、彼にその使命の実行について絶対的確信が与えられた。この確信と信頼を持って、1537年11月末にローマに入った。ローマで彼と同志たちはマンレサで受けた使命を実行することになった。この時から彼らは「イエスの仲間」と自称し、やがて「イエズス会」として知られるようになった。



ラ・ストルタでの神秘的示現(1537年11月)  
Carlos Saenz de Tejada 作 © 2021 Jesuit Institute

## ■ イエズス会

1539年の春、教皇パウロ三世は、イグナチオと同志たちに特別なミッションを与えてローマ以外の地に派遣した。彼らは、世界各地で福音宣教や人々の救いのために働くことを目的に派遣された。ここでイグナチオと同志たちは大きな問題に直面した。このままでは同志たちはみんな散逸してしまう。そして、今まで彼らはイグナチオをリーダーとしたグループで、互いに同じ権利を持っていた。しかし、今やこのグループを存続させるために、教皇の認可を得た正式な修道会として創立させることが重要な課題であった。彼らは長い祈りと議論の後、「イエズス会」を修道会として創設することを決定した。イエズス会員として、みんなが決める長上に従順を誓い、それによって、彼らは世界各地で働くことになり、心の一一致を保てたのである。1540年9月27日、教皇パウロ三世は「イエズス会」を修道会として認可した。1541年4月19日、同志たちはイグナチオをイエズス会の初代総長として選出し、彼に従順を誓った。

同志たちが世界各地へ派遣されている間、イグナチオは1537年にローマに就き、その後ローマから離ることはなかった。かつてヨーロッパを一人で歩いて旅した巡礼者イグナチオは、今や総長としてイエズス会本部にとどまることになった。世界中の様々な地域へ派遣された会員からの報告の手紙を受け取り、励ましと示唆に富んだ手紙を書いた。さらに創立されて日が浅いイエズス会の在り方と統治の基本的な方針を定めた『イエズス会会憲』を起草した。イグナチオはイエズス会員たちに、教皇からの派遣に対する応需性と機動性をいつも求めていた。つまり、イエズス会員はイエスの弟子のように、最も重要とされているミッションの場へ、いつでも直ちに赴く準備ができており、自分の使徒職が終わったら、あるいは他の人への引き継ぎが完了すれば、次のミッションの場へ移動するのである。

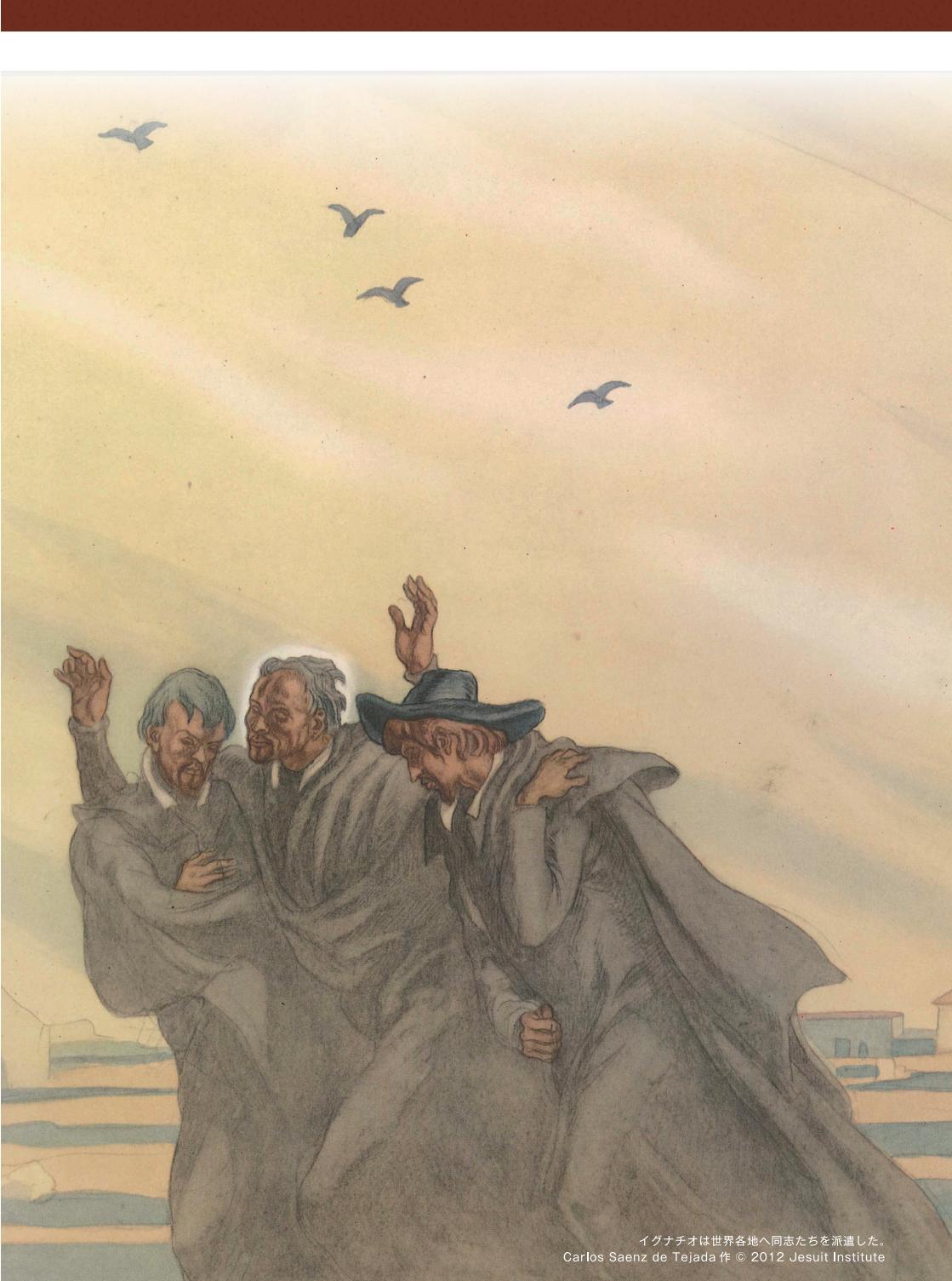
そのヴィジョンにおいて、「行け！神の愛で世界を燃え上がらせなさい！」と、イグナチオはフランシスコ・ザビエルをインド、スリランカ、日本、中国に派遣した。ディエゴ・ライネスとアルフォンソ・サルメロンも教皇の顧問神学者としてトレント公会議に派遣した。ペトロ・カニシウスを、ドイツの宗教改革運動からカトリックの信仰を擁護するために派遣した。また、彼は多くの学校や大学などを、イタリア、スペイン、フランス、ドイツで設立する企画を承認した。10年間の間に、彼は38の学校と大学を設立した。イエズス会員の宣教師はこのミッションを今日まで継続し、ヨーロッパを超えて世界中にたくさんの学校と大学を設立していく。その中の一つが上智大学(1913年開校)である。

イグナチオは人生の終わりに向かって、仲間に自分の人生を語った。これはイエズス会の仲間であるゴンサルベス・ダ・カマラが記録した『自叙伝』であり、イグナチオが若い時には想像できなかつた彼の回心と召命を理解するための重要な資料である。

胆石の持病により、ローマ本部で1556年7月31日の朝、巡礼者イグナチオは生涯を閉じた。また、1622年3月12日、フランシスコ・ザビエルと共に聖人に列聖された。



イエズス会認可(1540年9月27日)  
Albert Chevallier-Tayler 作 © 2011 Jesuit Institute



イグナチオは世界各地へ同志たちを派遣した。

Carlos Sáenz de Tejada 作 © 2012 Jesuit Institute



聖イグナチオ・デ・ロヨラ

Juan Martínez Montañés 彫刻 © GNU Free Documentation License.

# 「聖イグナチオの靈性」とは何であるか

「靈性」とは何を意味するのか。それは、宗教的な活動に限らず、靈的な意味や価値観、超越的な感覚によって形成された道、生き方を追求することを意味している。それは、様々な宗教や無宗教の人にも使われているが、もともとはキリスト教における、神のみことばのもとの生活を指している。

カトリックの伝統において、フランシスコ会、ドミニコ会など、様々な「靈性」の道があるが、どの「靈性」の道も聖書に書いてあるイエス・キリストの教えに根ざしている。これらの中で、「聖イグナチオの靈性」が評価され、広く実践されている。

「聖イグナチオの靈性」とは、神が私たちに呼びかけている生き方を完全かつ徹底的に生きるための方法、指示、規則などが入っている道具箱だと言えるだろう。すなわち、聖イグナチオは私たちに意識の究明、默想、觀想、靈的な対話、識別、選定の方法などを教えてくれる。それによって、私たちは神の呼びかけと愛に気づき、これに全幅の信頼をおいて生きることができる所以である。

「聖イグナチオの靈性」は他のキリスト教の靈性と同じように、イエス及び彼が伝えた喜びの知らせ(福音)との出会いに深く根ざしている。

その出会いを通して、私たち自身の人生の意味、長所と短所、そして最も深い意味で自分にとって良いものか悪いものかの判断をどのように下すのかを探求している。聖イグナチオによる祈りの手引き書である『靈操』の中で、彼はこれらを探求する方法を私たちに示している。その方法とは、私が自分の体験に注意を向け、自分の選択を見極めること(識別)、感謝の思いと深く大きな望みを持って実行すること、そして何よりも、私がイエスと出会うことである。

「聖イグナチオの靈性」は言うまでもなく、個人が神の呼びかけと愛に応えるための道である。しかし、イグナチオと同志たちは、それを自分たちの共同体の生活の在り方や方向性（方向性 - way of proceeding: 聖イグナチオの言葉で、物事を見て特定の方向を定めること）の識別に役立てることができた。

イエスス会の学校や大学は「聖イグナチオの靈性」に基づいて、教育のヴィジョンを明確にし、日々の教育実践の「方向性」を定めている。イエスス会の学校・大学に限らず、カトリックの学校や大学においても、「聖イグナチオの靈性」はそれぞれの学校に固有のアイデンティティを与えることに資することができるのではないだろうか。



イエスス会紋章

「IHS」の文字はギリシャ語表記のイエスの御名(IΗΣΟΥΣ)をラテン語表記に置き換えた。

文字の上には十字架を配し、下にはイエススを釘付けにした三本の釘がある。聖イグナチオをはじめ、歴代のイエスス会総会長がイエスス会の印として使っている。

# 聖イグナチオの靈

## ■ 経験や心の動きに深い注意を向ける

パンプローナの戦いで負傷(1521年5月20日)した後で、療養中に、イグナチオは自分の考え、感情、心の動きの違いに気を配り始めた。彼は、大小を問わず様々な出来事、そしてそれらの出来事が自分にどのような心の動き(慰め、喜び、希望、あるいは荒み、虚しさ、失望)を与えるかをよく注意するようになった。それによって、彼はたくさんのこと学ぶことができた。『靈操』の本の中で、彼は私たちに「日々の意識の究明」ということを提供した。それを実践することによって、私たちは日常生活の経験に注意を払い、自分の人生に神はどうのように存在しているか、日々の生活の中で私たちはどのように感じていたか、この内省がどのように次のことを決定する助けになるかに気付くことができる。

## ■ 識別する

イグナチオは自分の将来を空想している間、「少しづつではあったが、自分を動かす神と悪魔の二つの靈をわきまえるようになった…ある考えは自分を憂うつにし、ある考えは自分を愉快な気分にすることを見えた。」(『自叙伝』8)このように、自分の心の奥底にある喜びにつながるもの(イグナチオはこれを「慰め」と呼んだ)と、ある時は楽しくても、後で反対の方向に引っ張られるもの(彼はこれを「荒み」と呼んだ)を見分ける嘗みが、聖イグナチオの靈性の重要な用語である「識別」なのである。

# 性を特徴づける要素

## ■ イエスと出会う

福音書に書かれたイエスの生涯と教えを観想し、默想することによって、イグナチオは、彼自身に、そしておそらく私たちにも、多くの意味を与える生き方を見出した。自分が福音書の場面にいることを想像し、自分に直接語りかけてくるようにイエスの言葉を聴いていた。そして、自分のために、何らかの靈的利益を収める。『靈操』の本の中で、彼は私たちにこのような祈りの方法と40以上の祈りのテーマを提供している。イエスとのパーソナルな出会いを通して、私たちはますます神の教えを深く知ることができるし、「他者のために、他者とともに生きる人」になっていく。(『靈操』104)

## ■ すべてに感謝し寛大さをもって生きる

1529年9月、パリからルーアンに向かって歩いていたイグナチオは、長い間無気力に漂って人生の虚しさを抱いた後、突然に喜びと感謝の気持ちに包まれた瞬間が『自叙伝』に記録されている(『自叙伝』79)。それ以来、彼は毎日毎日すべてのものにおいて、感謝すべきことに気づくようになった。この感謝の習慣は、彼の人生観を変え、幸福感を持続させた。このことを体験して、彼の日々の感謝の気持ちは、より寛大になることで表現された。彼は、寛大さを「MAGIS」という特別な言葉で特徴づけた。「MAGIS」とはラテン語で「より多く」「さらに」という意味である。感謝すればするほど、より寛大に他の人に仕えるようになり、神の栄光がより大きいなるものとなっていく。(『靈操』233)

# ～聖イグナチオ・デ・ロヨラの足跡～

1491年	北スペイン・バスク地方のロヨラ城で生まれた。
1506年	15歳になった時、彼はスペイン王家の財務長官に招かれた。財務長官の下で、イグナチオはぜいたくな生活を送り、勇敢な騎士になっていた。
1521年5月20日	パンプローナの戦いで負傷した。
1522年2月24日	ロヨラ城での療養生活の後、エルサレム巡礼に向かう途中に立ち寄ったモンセラットの黒い聖母像の前で、徹夜で祈った。
1522年3月 1523年3月	マンレサで神秘的な体験をした。
1524年-1528年	エルサレム巡礼の後、バルセローナでラテン語を学び、ラテン語講座の修了後、アルカラ、サラマンカ(スペイン)で人文学や哲学を学んだ。
1528年-1534年	パリ大学で学ぶことで、後のイエズス会創立の同志となるペトロ・ファーブル、フランシスコ・ザビエルらと出会う。
1534年8月15日	モンマルトルで同志たちと一緒に清貧・貞潔・エルサレム巡礼の三誓願を立てた。そして巡礼して聖地にとどまることができなければ、ローマに行き、教皇の決定に身を委ねた。
1537年6月24日	ベネチア(イタリア)でイグナチオは司祭に叙階された。
1537年11月	ラ・ストルタ(ローマ)で祈っていた時、「イエスのそばに自分を置いていただく」ビジョンを見た。「イエズス会」という名称はこの体験に由来する。
1540年9月27日	ローマ教皇パウロ三世は、イグナチオと同志たちが創立する新しい修道会「イエズス会」を認可した。
1541年4月19日	イグナチオを初代総長に選出した。
1556年7月31日	イグナチオ、帰天。
1622年3月12日	フランシスコ・ザビエルと共に聖人に列聖された。



聖イグナチオ・デ・ロヨラの榮光  
Francesco Saverio 作 ジエズ教会（ローマ）

## ■ 編集あいさつ

このブックレットは、『神の指ここにあり－聖イグナチオの生涯とイエスス会創立の物語－（李 聖一著）』と『聖フランシスコ・ザビエルの師－聖イグナチオ－（パウロ・フィステル著）』を参考に、編集しました。このブックレットを通して、聖イグナチオの生涯と靈性についてさらにを理解を深め、聖イグナチオの回心とともに、私たちも日々の生活と仕事の中で新しくなることができることを祈っています。最後になりましたが、デヴィッド・ウェッセルズ神父、キエサ・ロバート神父、萱場 基神父、そしてカトリック・イエスス会センター長 李 聖一神父に感謝いたします。皆さんのご協力により、このブックレットを発行することができました。

2021年7月31日 聖イグナチオの記念日に  
グエン・タン・アン

### 聖イグナチオの生涯と靈性

～聖イグナチオの回心とともに～

2021年10月15日発行

編集責任 李 聖一

編 集 グエン・タン・アン

表 紙 画 ロヨラ城での療養生活 (1521年-1522年)  
Albert Chevallier-Tayler 作 © 2011Jesuit Institute

発 行 上智学院 カトリック・イエスス会センター

印 刷 三鈴印刷株式会社

上智学院 カトリック・イエスス会センター

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

メールアドレス [catholic-co@sophia.ac.jp](mailto:catholic-co@sophia.ac.jp)

ホームページ <https://dept.sophia.ac.jp/jec/>



Ignatius  
to see all things  
new in Christ